

弱者の目、耳、口に

ともに生きて

③

賀川豊彦 活動開始100年

「私たちは、賀川豊彦が実践したセトラ（地域に生きる人々と共に歩む者）の精神を受け継ぐ」。賀川が創立した組織で、今も幅広い社会事業を展開する社会福祉法人・学校法人「イエス団」（本部・神戸市中央区）が10年前に定めた憲章の一節だ。

賀川は1914（大正3）年から3年間、米国に留学し、スラムに病院や学校、保育所、宿泊所な

地域と歩む

どの施設を設ける社会活動「セツルメント」に大きな刺激を受けた。帰国後、診療所「友愛救済所」を設けたり、古着市を開いたりするなど、地域とともに歩む姿勢を貫いた。

◇

イエス団常務理事で、賀川記念館の初代館長村山盛嗣（77）＝神戸市西区Ⅱが初めて賀川と出会ったのは終戦の翌年だった。尾道（広島県）にいた村山は、戦後復興の

米国で学んだ社会活動

賀川の生誕100年を記念したモニュメントの前で語る村山盛嗣さん（手前）と、イエス団本部事務局長の中田一夫さん＝神戸市中央区小野柄通1、生田川公園（撮影・三津山朋彦）



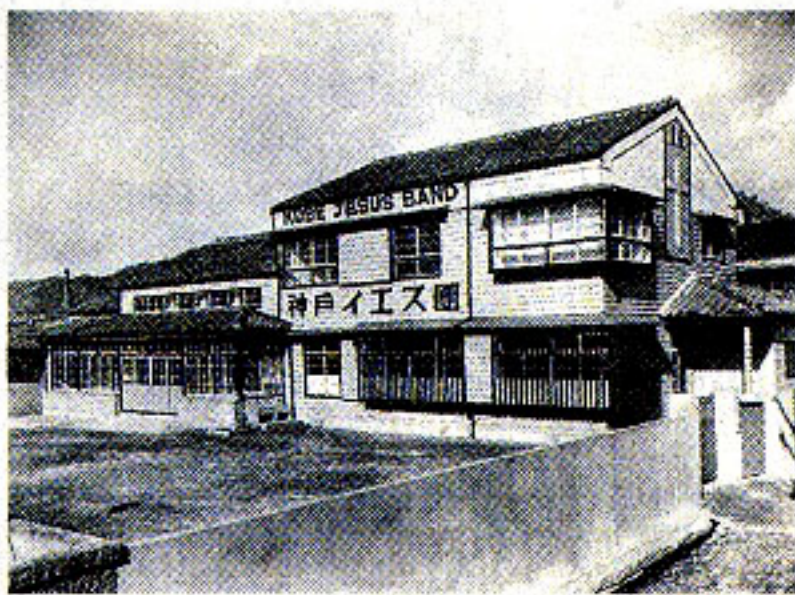
ため全国各地を行脚していた賀川の講演に立ち会った。「内容は忘れてしまったが、青年の血が沸き立った」と興奮気味に語る。

その後、同志社大学院神学研究科を修了し、大幸伝道所（徳島県）に赴任したが、半年後に賀川から手紙が来た。「神戸に来てくれませんか」。徳島で当分働くつもりだったので断ろうと面会したが、当時70歳手前の賀川が村山を手招きし、深々と頭を下げてどうかよろしく願います」と言った。思わず「はい」と答えたという。「賀川先生には特別な人格の力が備わっていたんでしょね」

村山は58（昭和33）年11月、神戸イエス団教会の牧師として、神

戸に移り住み、地域の救済活動に力を注いだ。「救済の基本は心。困っている人々に近づき、私もあなたと一緒に苦しみましょう、というところから始めた」

「セツルメント事業の根本原理



神戸イエス団教会だった建物
＝昭和20年代

は人格交流運動」という賀川の理念を継承する拠点として、賀川記念館の建設事業にも事務局長として取り組んだ。

村山は病床にあった賀川を訪ね、建設の同意を得た。「イエス団のことはご心配なく」と声を掛けると、賀川は小さくうなずいた。賀川と会った最後だった。

記念館は、賀川の死から3年後の63（昭和38）年、神戸市中央区吾妻通5に完成。神戸市初の学童保育や高齢者向け給食サービスを行ったほか、弁護士らによる相談事業や子ども会や福祉会など、地域福祉センターとして隣保事業にも取り組んだ。村山は約40年間、館長を務めた。

◆

長年、地域に親しまれてきた記念館は老朽化で建て替えられ、この1日に完成した。4月には館内に、賀川の業績を紹介するミュージアムも開設する予定だ。

村山は今、最高の社会福祉の原理と考える賀川の言葉を後輩たちに送る。

「困っている人、弱々しい人の、目となりましょう。耳となりましょう。そして口となりましょう」

＝敬称略
（河尻 悟）